

♪ 2020年度 **poco a poco** ♪

Nr. 8 2020年9月2日(水) 文責:プファイル・辰巳

大きな声で歌いたいけど・・・

2学期が始まって早2週間、先週からは時程も平常通りになり、お弁当や技能教科も始まりました。1日の授業時間が長くなりましたが、元気に過ごせているでしょうか。パウゼの時間に子どもたちの元気な声が戻ってきたのは、とてもうれしいです。

残念ながら音楽の授業では、まだ大きな声で歌ったり、管楽器を吹いたりすることはできません。それでも、楽譜を見ながらピアノと一緒にハミングしたり、ミニ鉄琴や打楽器を出して合奏したりしています。あの手この手で音楽を楽しんでもらえたらなと、いろいろ考えを巡らせています。まだやってみていませんが、「サウンド オブ ミュージック」のマリア先生のように、お天気の良い日には、子どもたちと校庭に出て合唱したり、リコーダーを吹いたりしてみたいな、とも考えています。(ヘッセン州では戶外での合唱や吹奏楽は許可されています。)



音楽こぼれ話 <大作曲家の家族たち

⑨ メンデルスゾーンの妻セシール>

コロナ対策が始まる前、まだ2019年度だった今年の始めごろまで、このテーマで連載を続けていました。1回目のモーツァルト家に始まり、シューマンの妻クララ、ヴェルディの妻ジュゼッピーナ、スカルラッティ父子、大バッハの息子たち、ハイドン兄弟、ドヴォルザークの子孫、ショパンの恋人ジョルジュ・サンドまで、8回に渡って大作曲家の家族にまつわるお話を紹介してきました。(興味のある方は日本人学校のブログをご覧ください。) 1学期は中断しておりましたが、久しぶりに第9話「メンデルスゾ

ーンの妻セシール」のお話をお届けしたいと思います。

ドイツ・ロマン派の大作曲家の一人に数えられるフェリックス・メンデルスゾーンは、1805年ハンブルクの裕福なユダヤ人家庭に生まれ、41歳で短い生涯を終えるまでに「ヴァイオリン協奏曲ホ短調」や「結婚行進曲」などの有名な曲を作曲しました。また忘れ去られていたバッハの作品を再演し、大バッハの真価を後世に知らしめたのもメンデルスゾーンの大きな功績です。

さて、そのメンデルスゾーンの奥さんになったのが、セシールさんでした。この女性はフランス人ですが、当地フランクフルトに在住していました。指揮者としての仕事でフランクフルトにやってきたフェリックス・メンデルスゾーンと知り合い、1837年、二人はフランクフルトで結婚式を挙げました。メンデルスゾーン夫妻はライプツィヒに住み、5人の子どもをもうけます。子どもたちは音楽家にはなりませんでしたが、それぞれ歴史家や化学者として立派に成人しました。セシール夫人は物静かで、優しく夫に寄り添う家庭的な女性だったそうです。

1847年に夫を亡くしたセシール夫人は、ライプツィヒを去り、ベルリンの親戚の元に身を寄せていましたが、1853年、フランクフルト滞在中に35歳の若さで亡くなりました。彼女のお墓は今もフランクフルトの中央墓地に残っています。

ちなみに作曲家メンデルスゾーンのお墓は、ベルリンにあります。フェリックス・メンデルスゾーンには、ファニーというお姉さんがいたのですが、実はこのお姉さんも優秀なピアニストであり、女性作曲家のパイオニアでもありました。時代が女性作曲家の活躍を阻みましたが、弟フェリックスのよき理解者・助言者でした。姉弟の関係は、親密で強い信頼関係で結ばれていたといえます。そのことを証明するかのよう、ファニーが脳卒中で急死した半年後、フェリックスも姉の後を追うように亡くなりました。そして二人は、ベルリンの墓地で今も仲良く隣合って眠っているということです。

ほんのちょっとだけ 演奏会情報

Alte Oper startet!

コロナ対策のため中断されていたアルテ オペラのコンサートシーズンも、いよいよ再開される見通しです。ただし、コンサートの開催方法は大幅に変わるようです。例えば、途中のパウゼはなくなり、軽食等の販売もなくなるそうです。コンサートの演奏内容が大幅に変更されるため、これまでに販売されたチケットも無効となる場合もあり、払い戻しの作業が必要になるかも知れません。詳しくは直接お問い合わせを!